
Deadend Game

神楽 蒼夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dead end Game

【コード】

N5462I

【作者名】

神楽 蒼夜

【あらすじ】

一人の少年が仲間の力をかりつつ成長していく物語・・・

「ええ、私です。なにかありましたか？」

天界を追放され、魔界に墜ち魔王となり、天界に仇なす者であるはずの彼を

神が呼び出すというのはどういうことなのであるうか。

人間に恩恵を与えるもの「善・害を与えるもの「悪

人間はそういう概念で彼らを分けているが、

実はそういうものはなく、悪とされている者達は自分の欲望を抑えられない・・・

いや、押さえることをしないから「悪」とされているのである。

「うむ、実はな・・・そろそろ人間を滅ぼそうと思うのだ」

「え？」

それはいきなりの宣言だった。

「なに、驚くこともあるまい。過去にもやったであろう？」

「ノア・・・ですか」

神はノアの箱舟の話を引き合いに出しているようである。

「あの時は一組の夫婦を残してやったな。だが今回は完全に絶滅させようと思う」

「それは・・・どういうことなのですか？」

彼はいきなりの神の宣言に動揺することもなく、至極当然のように聞き返した。

「うむ・・・人間は私が作った世界を破壊するだけであろう？」

「ええ、しかし破壊だけではなく、再生の道を模索してもいます。」
「それでは遅いのだ。あれらはあまりにも汚しすぎた。これ以上見ておつても穢れる一方だろう。」

「それならばいつそ今すぐに絶滅させた方がよからう」
「お待ちください！私は納得できません！」

これまで人間を見守り、そして時には知恵を与え、また時には天恵として諫めたりしていた彼は
どうしても納得できないでいた。

「まあ聞け・・・私はこの世界には人間はもはや不要だと思つのだ」
神はまるで「壊れた玩具は不要だ」とでも言うように人間を処分するつもりでいるようであつた。

「人間にも救える者はいます！」

彼は人間を愛していた。

自らの子のように、そして自らの恋人のように・・・
しかし神は考えを変える様子を見せず、

「ルシフェルよ。お前にとって人間がかわいいのはわかる。
しかしな、そろそろ見切りをつけてはどうだ？」
「・・・どうしてもお考えは変わりませんか？」

彼は、湧き上がる怒りを抑えつつ静かに答えた。

「まあそう熱くなるな。そうだな・・・それではゲームをしようではないか」

ルシフェルを怒らせて魔との戦いになると、古の神魔戦争の二の舞になると感じた神は、この争いをゲームとしないかという話をもちかけた。

「ゲーム……ですか？」

彼は急にそんな話をされても何のことか分からずただ聞き返すだけだった。

それに対し神は

「そうだ、ゲームだ。私が駒とするものとお前が駒とするものを戦わせて

その勝敗でどうするかをきめようではないか」

「そのゲームに私が勝てば……人間を滅ぼすのはやめるのですね？」

「うむ、しかし私が勝てば宣言通り人間は絶滅させるぞ」

それは人間という種の命運がかかったゲームである。

だがルシフェルはこの勝負を拒むわけにはいかなかった、拒めば、おそらく神はその場で人間を絶滅させたであろうから。

「ではどういうルールでゲームをするのですか？」

「お前は話が早くて助かるな。ルールは……そうだな。

お互いの部下を駒として人間のサポートにつける。

そして、サポートのついているもの同士を争わせる」

そこまで言った後で神は、ふと思立ったように

「それから、私とお前は駒の指し手ということで参加は不可だ」

と付け加えた。

「しかし、それではあまりに多くの犠牲が出るのではないですか？」
そうルシフェルが言うと、

「そうだな、それではお互いの駒の数を限定しようではないか。
お互いに50人・・・ではどうか？」

それはけして少なくはないが、多すぎるといふ数でもなかった。

「・・・分かりました。ところで部下の人選はこちらで決めてもよ
ろしいのですか？」

「かまわん。だがな、お互いの総力を使うとこのゲームが終わらん
こともありえるのでな・・・」

もっとも力の強い部下はお互いに4人とする。それ以外は適当に
選んでよい」

「そうですか・・・それでは今から部下を選ぶことにします」

そうルシフェルが言い、席を離れようとした。

その時入り口が開き、一人の女性が入ってきた。そして、

「失礼、そのゲーム・・・我々も参加させていただきたい」

部屋に入るなりそう言った彼女に、ルシフェルは一瞬言葉に詰まっ
たが、直ぐに思い直し声をかけた。

「これは風の精霊王殿ではありませんか」

「これはこれは魔界を統べる王殿、お久しぶりですね」

「私にはルシフェルという名がありますが・・・」

「そうですね。でも私にも『シルファリア』という名前があるので

すよ?」

いきなりの言葉で機先を制されたルシフェルだったが、軽く両手をあげ苦笑しつつ、

「そうですね。無礼をお許しただけですか?シルファリア殿」

と、場の雰囲気崩さないように謝罪すると軽く頭を下げお辞儀をして見せた。

「いいですよルシフェル殿、もちろん許しましょう」

そついう風に鷹揚に答えたあと、風の精霊王ことシルファリアはとても楽しそうに笑顔になっていた。

「ところでシルファリア殿。このゲームに参加されるというのはどういうおつもりなのですか?」

「ルシフェル殿、いえ、参加というのは神魔どちらかに加担する・・・

というわけではなく、あくまで中立という立場で

参加をさせてもらおうと思つのです」

「それは一体どう言つ・・・」

ルシフェルがシルファリアにそこまで言った時、彼女の背後から

「それは私が説明しましょう」

と、蒼い髪をした美しい女性が現れた。

「これはウィルアーナ殿、貴方もこられていたのですか」

「ええルシフェル様、でも私とシルフアリア様だけではなくて四大精霊王は全員ここに来ていますわ」

そついうと水の精霊王である彼女は後ろにいた者たちに室内へ入るように促した。

彼女の後ろには炎の精霊王であるサーカルディアと地の精霊王であるノーグウエスがたたずんでいた。

「これは・・・四大精霊王が揃っておいでとは珍しい」

ルシフェルが言うように精霊王が神の宮殿に来ること自体が珍しいことであった。それも今回は4人が揃ってのことである、ルシフェルが驚くのも無理もないことであった。

「神よ、私の口から説明させていただいてもよろしいですか？」

「ウィルアーナか。よい、申してみよ」

「ありがとうございます。これは我々四大精霊王の総意なのですが、人間は水を汚し大地を崩します。それを踏まえ、水と地は人間に敵対したいと考えました。しかし、火を扱い風を友とする人間もいます。そこで火と風は人間の味方をしようと考えました。

つまり4人の意見が2つに分かれたのです。これが3対1なら片方に

意見を纏めるところなのですが・・・半々に分かれてしまったので中間の案をとることにしました。神の側が人間の破滅、ルシフェル様が

人間の保護・・・ということなので我々精霊側は中立ということにしようと思います」

そこまで一通り言って、彼女はルシフェルと神を交互に見た。

「それは・・・あくまで中立で不干涉ということですか？」

「いいえそれは違いますわ。不干涉なのではなく、

契約した相手の意思を反映させる・・・ということですよ」

「つまり、契約相手が破滅の側に回れば破滅に。保護の側に回れば保護に・・・ということですか？」

ルシフェルからの質問に頷きつつ

「そういうことです。契約相手によっては仲間となることもあるでしょう。」

そのときはよろしくお願いいたしますわ」

と、そう答えた。

「なるほど、場合によっては敵にもなるのですね。覚えておきます。さて、神よ。私は万魔殿バンデモニウムに戻り今回のゲームに参加させる部下を選ぶことにします」

ルシフェルは神にそう告げると、素早くその場を離れようとした。

「ルシフェルよ。私は熾セラフィム天使であるミカエル・ガブリエル・ラファエル・

ウリエルを出すつもりでいる。お前もそのつもりで部下を選ぶがよい。」

それに見合うだけの者がいれば・・・だがな」

「そうですね。まともに戦える部下を選んでみますよ。」

それでは、また後日」

そういうとルシフェルは足早に神の居室を離れたのだった。

プロローグ1（後書き）

初投稿になります。誤字脱字等ありましたら教えていただけると嬉しいです。

プロローグ 2

彼はそのまま万魔殿に帰らずに天界の中にある

中央図書館の裏の花畑へと足を運んだ。

なぜならその花畑に魔界へ続く門があるからである。

彼が門を開こうとしたとき、見覚えのある人影が現れた。

「おや？アスモデウスじゃないか。こんなところで何をしているんだ？

ここは天界のはずだが・・・」

ルシフェルがそう声をかけると、

「ああ、どなたかと思えばロードではないですか。何をしているのかといわれても、

私は図書館に本を読みに来ているんですが。それとも私がここにいては

何かマズイですか？」

「ああそうか、お前は天界の図書館に通ってもかまわなかったんだっただな。

それで？ここにいるということはもう読みたい本はすべて読み終わったのか？」

「いえ、読みたい本はまだあるんですが、そろそろ友人が来る時間なので

「この花園に来ているんです」

ルシフェルは納得がいったという顔で彼女の方を見やったが、彼女の『友人』という言葉聞き少し怪訝な顔をした。

「ふむ・・・ここは天界なんだが友人がいるのか？」

「ええ、もう来るはずなんです。一緒にお茶を楽しもうということだったので」

「ここで待ってるんですよ」

彼は『友人ね・・・』と思いつつ彼女に少し話しておこうと口を開きかけたが、彼の言葉をさえぎるように後ろから声かけられた。

「アーちゃん、来ていますかあ？」

「うん、ここにいるよ。準備、手伝おうか？」

「いいえ、大丈夫ですよ。ところで一緒にいらっしやる方は・・・
ルシフェル様じゃありませんかあ？」

急に自分に声をかけてきた相手を見ようと彼が振り向いたとき、そこにいた相手はかつての部下であり天界軍第二位の実力をもつ燭天使のガブリエルその人だった。

ちょうどお茶の時間ということと二人でお茶を楽しむというつもりで準備をしてきていた彼女は、ルシフェルという珍客のことを考慮して3人分のお茶を用意した。ルシフェルは誘われるままに2人と一緒にテーブルに着きお茶を楽しむことにした。

「アスモデウス・・・お前の友人というのはガブリエルの事だったのか。」

しかし魔界軍第二位のお前が天界軍第二位のガブリエルと懇意にしているとは思わなかったぞ」

「私は、先代アスモデウスから位を譲渡されるまでは天界で学んでいましたから。」

彼女とはその頃からの付き合いなんです」

「そうですねですよ。アーちゃんは昔から頭も良くて成績もいい優しい子だったんですよ。ルシフェル様もいじめないようになしてあげてくださいねえ？」

「リル！いつも言ってるけどそう言う方はしないで欲しい！」

「え？アーちゃんが優しくして美人なのはほんとのことなんだから別にいいでしょ？」

「だからそういう問題なんじゃなくって・・・」

ルシフェルがそこにいることなど意識にないように、二人は言い合
いを始めた。

彼は、アスモデウスは感情を表に出さないタイプだと思っただ
けに驚きつつも

ほほえましくその会話を聞いていた。しかし、一向に二人の会話が
終わりそうもない

様子であったためこう声をかけた。

「お前たち、言い合いをするのはいいが少し私の話を聞け。

それにアスモデウス、お前がそんなに声を荒げているのは初めて
見たぞ。

それからガブリエル、お前は相変わらず間延びしたような気の抜
けるような

話し方だがいい加減直せ。昔私の部下であった頃にも何度も言っ
ただろう」

ルシフェルがあきれたようにそう言ったとき、
アスモデウスは少し驚いたような表情をした後、
彼の方へ向き直り居心地の悪そうに、

「・・・失礼しました。ところでロードは天界で何をされていたの
ですか？

私と違い図書館への用事・・・ということもなさそうですが。」

「ああそういえば神様のところに行かれてたんですよねえ？たしか
神様が

『暫くしたらルシフェルがここに参るから人払いをしておけ』って

言われて

ましたから、そうですね？」

ガブリエルは不意に思い出したようにそう言った。

それは、ルシフェルに話し方を注意されて気まずい……
というものではなく、単に思い出したから聞いてみた……
というような言い方だった。

「なんだ、知っていたのか。それなら話が早い。と、その前にお前たちに

聴きたいことがあるんだが、お前たちは人間をどう思っている？」

「人間を……ですか？ 私は友として付き合っていくように父から、
いえ先代アスモデウスから言われていますが？」

「わたしは、道を間違えやすい方たちが多いので、
良い方向へ導いてあげないといけないと思いますよあ？
それにわたしもアーちゃんと一緒に、友達のように、時には恋人の
ように付き合っていないか、いけないと思いますよ。」

と、以外にもガブリエルまで否定的な意見を出さなかった。
ルシフェルは、神との話し合いで決めたことと、精霊王が絡んでき
ていること、

そして魔界がコレに負けると人間は滅ぼされるということを簡単に
説明することにした。

「そうか、お前たちの考えは分かった。コレはさっき神と話し合った事だから

まだ誰も知らないことだ。いいか？心して聞くように。

実はな、神は人間を滅ぼすつもりだ」

「それは一体どういうことなんですか！」

「あらあら、アーちゃん落ち着いて、ちゃんとルシフェル様が説明して

くださるでしょうから。ね？最後までちゃんと聞きましょうね。」

ルシフェルは内心『いいコンビだな』などと思いつつ、

『いまはそんなことを考えている場合じゃない』と思い直し再び説明を続けた。

「ガブリエルの言うとおりだ、少し落ち着け。

神はな、人間が神の作った世界をこれ以上穢すことが気に食わないらしい。

そこでノアのときのようにすべてを水没させてしまおう気になっているよ
うなんだ。

だがな、今回は前回と違って一人の人間も残す気はないらしい。
絶滅させる・・・と言い切っていたからな」

「私は反対です。人間はこれまで我々が助けて導いてきた種族です。
そんな人間を今更絶滅させるなど納得がいきません」

「これって神様の決定なのですか？」

アスモデウスが憤りを隠さずにそう言った後に、
ガブリエルがルシフェルにそう問いかけた。

「そつだ。神は撤回する気はないらしい」

「ルシフェル様はもちろん人間の保護をされるおつもりなんですよ
ねえ？」

「当然だ。私は人間を見捨てるつもりはない」

「そうすると……神魔戦争の繰り返しになるんじゃないです
かあ？」

「私もそう思い、神に『私はあくまで人間の保護をする』と断言し
た。

たとえ神魔戦争の繰り返しになっても私は人間の保護を止めるつ
もりは

ないことをしっかり伝えた。するとだな、神の方から

『被害を軽減するためにある方法で争う』という妥協案が出されて
な。

私もその案を受け入れることにした」

「その案というのはどういったものなんですか」

「それはな……【ゲーム】だ」

「ゲーム？」

「ゲーム？」

アスモデウスとガブリエルが同時に繰り返した。
それほどこの案が意外だったのだろう。

「ああ、ゲームだ。どうやら魔界と天界のものを人間のサポートにつけて人間同士で争わせるつもりらしい」

「でも、それだと人間界の被害がものすごいことになるのでは？
それはかまわないんですかあ？」

「そうですね！人間の保護を目的としているのに人間界への被害を減らせないなんて
本末転倒じゃないですか！」

ガブリエルが的を射た質問をすると、アスモデウスが憤りを抑えな
いまま
ルシフェルに食って掛かった。

「もちろん分かっている。だからサポートは天界軍・魔界軍ともに
五十人までとし、

サポートについているものは直接攻撃してはいけないということ
になっている。

だがな、

『ゲーム用の簡易契約ではなく人間との本契約をしているものはこ

の範疇にない……』

ということになっているのだ。この意味がわかるか？」

「つまり、本契約してる人間がそれを望めば攻撃してもかまわないって言うことですよねえ？」

「その通りだ。まあこれも人間と本契約をするような物好きがいないだろうという

考えで作られたルールだからな。プライドの高い天使や魔族が人間と本契約する

とは考えられないが、もしもの時にルール違反とならないように細かく作ってある。

それから、ルールを破った場合は強制送還の後、50年間の封印刑となっている。

くれぐれもルールを破らないように」

「50年の封印刑ですか？それはちょっと嫌ですねえ」

そのとき、ここまでおとなしく話を聞いていたアスモデウスが、

「マイロード、その50人に私はふくまれるんですか？」

それから、簡易契約とは一体どのようなものなんですか？」

と、質問をした。彼女は先代である父親から魔王アスモデウスという位を

譲り受けてまだ間もなかった。そのため人間と契約をしたこともなく、

人間界へ降りたことすらまだ皆無であった。

「そうだな、お前は50人に含まれる。50人の中にSランクである天界・魔界の中でも強者と呼ばれるものは4人しか含ませることは出来ないのだ。」

だから魔界軍第二位であるお前は確実に選ぶことになる。それ以外のランクの

ものはあわせて50人になるまで好きなものが選べるのだがな熾セ^{ライム}天使である、

ミカエル・ガブリエル・ラファエル・ウリエルの4名だと断言してくれただぞ。

それに見合うものを出すように・・・とな

「まあ、わたしもですか。でもそうになるとアーちゃんとも戦わないと

いけなくなるんですよねえ？」

「私もできればリルとは戦いたくないな・・・」

仲の良い友達であるガブリエルとアスモデウスはお互いを傷つけたくないと思っただらしく、

この戦いに乗り気ではなかった。

「それに、わたしも人間を滅ぼさなくてもいいと思うのですよ」

「神の使徒であるお前がそんなことを言っていてどうするのだ。神の命令は天使である」

お前たちにとって絶対の物のはずだが？」

「でもわたしは前にも神様の指示に逆らってしばらく封印されていたことも

あつたりするですよ」

そういつて苦笑するガブリエルを見つつ、ルシフェルは

「だが今回はそうも言っていられまい。お前は天界軍第二位だから軍の4分の1を統括する

立場になるだろう。そうなればお前も甘いことをいえなくなるはずだ。たとえ親友でも

敵として相対したなら、それは倒すべき敵になるのだ」

そういつてアスモデウスのほうへ向き直り、

「アスモデウス、お前も敵としてガブリエルに出会ったなら、躊躇せずに倒すようにしろ。

どうせ契約している人間が死んだとしても契約している天使や魔族は傷つくことはない

のだからな。さて、私は先に万魔殿に戻るとする。お前も早めに戻って来い、

ゲームに参加させるものを決めなければならぬからな」

というと、一人席を立ち門へ向かって歩き出した。だがルシフェル

も心の中では

「友人同士が戦うことにならなければいいが」と思っていた。

しかし、魔族を統括する王として、また人間を保護する者たちの長として甘いことを言っではいけないのであった。

彼が門に消えるのを見送っていた二人は、どちらからともなく口を開いた。

「アーちゃんは・・・わたしと戦うことになったらどうするの？」

「・・・私は・・・分からない。でもリルとは戦いたくない・・・」

「わたしは～アーちゃんと会ったら急いで逃げるようにしようかな～なんて思ってるよお？」

「そうすれば最後の最後まで戦わずにすむと思うから～だからアーちゃんは心配しないでね～」

「うん・・・でもどうにかして戦わなくてすむ方法があればいいんだけど・・・」

「どうしようもないのかな」

「ん～とりあえず準備をしないとイケないって言うことだから～わたしは神殿に戻る」

「ことにするねえ。アーちゃんは どうする？」

「私も万魔殿に戻るよ。詳しいルールやメンバーを聞いておかないといけないから。じゃあ、

次会えるときは人間界で・・・になるのかな。最後まで戦わなくていいように頑張るよ」

「はい、わたしもがんばりますよ、それじゃあアーちゃん、しばらくの間さようならですねえ」

「うん、じゃあまた一緒にお茶のもうね。それじゃあ」

そういつて二人は握手を交わしお互いのいるべき場所に戻っていった。
こうして物語の幕は開くのだった。

プロローグ2（後書き）

とまあええプロローグ終わりです。次回からは本編……のはず
？

第1章 1話『追憶と資格』

「そつちへ行つたぞ！」

「違う！あつちだ！」

数人が走ってくる足音が聞こえた。

「いたぞ！追い込め！」

追いかけている方の人数はおおよそ8人、1人で相手をするには少々荷が勝ちすぎる様子で、面倒だったから逃げていた。

彼の名は『御影 蘇芳』（みかげ すおう）人間の存亡をかけた神のゲームの登場人物の1人で、Sランクの契約者である。

このゲームは、神が創った世界を汚し・壊し・蹂躪する人間を、神が良しとせず滅ぼそうとしたことから始まった。

このゲームのルールは天界の王である神と、魔界の王であるルシフェル、

それに精霊界の王である4人（シルファリア・ウィルアーナ・サーカルディア・ノーグウエス）

が話し合いをして決めたとされている。

このゲームのルールとは、『人間のサポートに各勢力の人員を付け、

ゲームに参加している人間同士を戦わせる。そして天界が魔界が勝者を決定し、

天界が勝てば人間界は崩壊。魔界が勝てば人間界を神の手から守り、人間を繁栄させることを許可する。また精霊界は中立とし、契約した人間の意志を尊重する』

というものである。このゲームに参加させる人間はランダムに選定され、

契約をする相手によりランクが決まる。

ランクの内訳は

ランク	契約相手	最大人数
S	熾天使・魔界の王族・精霊王	各四人
A	智天使・大臣クラス・各精霊	各六人
B	座天使・それ以下の2体・各精霊	各十人
C	能天使・中級魔族・各精霊	各十五人
D	天使・下級魔族・各精霊	各十五人

の、各勢力合計五十名である。各ランクごとに呼び名が違い、

ランク	呼び名
S	マジッククリエイター 魔法創造師
A	アルケミスト 錬金術師
B	エンチャンター 付与魔術師
C	ウィザード 魔術師
D	マジシャン 魔法使い

となっている。また、精霊と契約したものは呼び名と使える能力が限定されてくる。それは、

ランク	呼び名	主な能力
-----	-----	------

- S エレメンタリー 全精霊の力を制約無しに使える
- A フォース 制約した四大精霊の力を使える
- B ナイト 制約した精霊の力を使って戦える
- C コンタクター 精霊と話が出る
- D ウィスパー 精霊の声が聞こえる

と言うものになっている。これらのルールは変更されることがなく、またルールを破ると、契約している人間はすべての記憶を消されてもとの生活に戻される。

しかし天界・魔界・精霊界のものは、ルールを破った直後に時間凍結され

以後封印刑に処され厳重に罰せられる。このルールは、大きく分けて3つ、

- 1・契約している人間を自らが殺してはならない
 - 2・契約（ゲーム用の仮契約）している間は自らの魔力を用いて戦ってはならない。
 - 3・このゲームにおいて、遺恨を残すなかれ
- という3つである。しかし例外があり、

『ただし、契約期間中（ゲーム用仮契約）に契約者と本契約を結んだものは

このルールの範疇に含まれない』

と決められていた。この本契約というものは、天使・魔族共に一度結ぶと

契約者である人間が死ぬまでと解約されることがない。

いふなれば人間の結婚のようなものである。

しかし、この契約には離婚と言う概念は通用せず、お互いが生きている限り消えることのない絶対の絆となるのだった。

さて彼の話に戻ろう。彼は現在追われていた。

しかも天界・魔界の両方の勢力からである。Sランクの力を持っているのだから

撃退すればいい・・・そう思うだろう。しかし、彼はいまだに逃げ続けていた。

それはなぜか？そう、実は彼はまだ魔法が使えないのであった。

「くそつ、もう逃げられないか！」

行き止まりに追い込まれ、逃げ道を失った彼は実力を発揮せずにごのまま死んでいくのだろうか。

「どこか・・・逃げ道は・・・チツ！ないのかよ！」

そのとき不意に背後から声がした。

「だから魔法の使い方を先に覚えろと言った」

「アスモデウス！いるなら助けるよ！お前は俺の契約相手なんだろう！見殺しにする気かよ！」

「魔法の使い方を教えようとしたら『帰ってから聞く』と言ったのはマスターだったはず。
私は教えようとした」

彼の契約者であるアスモデウスは、マスターである彼の生死には興味がないようで、
淡々と答えるだけだった。その様子に彼は腹が立ったが、逆に冷静になってこう切り出した。

「わかった。今から使い方を教えてくれ。あいつらに追いつかれる前に

仕えるようにしてくれないか」

「承知した、使い方を教えよう。マスター、お前が選択した魔法の使い方はカードだ。

詠唱して発動できる状態になった魔法を、そのままカードに封印して、

必要なときに無詠唱で使うようにするものだ。使い方は、魔法の詠唱をして、

発動対象をカードにすれば魔法がカードに封印される。使うときは魔法の名を呼べばいい」

「なるほど、でも俺はカードなんか持ってないぞ？」

「ここにある。渡そうとしたが、その前にお前は部屋を出てしまった。

これからはいかなるときも体から離さないようにした方がいい。

「いつ襲われるか分からないから」

そついいながら彼女がカードの束を渡してきた。魔王である彼女と契約しているのだから、

天界軍に追われるのは分かる。しかし、同胞であるはずの魔界軍にまで追われる

と言つのはどういふことであろうか。

「あの〜マスター、早く魔法を用意しないと近くまできてるみたいですよ〜?」

「わかった。さんきゅ!そのまま見張つてくれガブリエル!」

そう、彼は熾天使であるガブリエルとも契約しているのである。

そのため、魔界軍・天界軍両方から敵対勢力として認識されていた。

この場を切り抜けるには追いかけてきている相手を撃退するか、

相手の軍勢の契約者を具現化させて納得させるしか道はなかった。

第1章 1話『追憶と資格』（後書き）

続けられるか不安ですが、書けるだけ書いてみようと思います。

1話 2

しかし契約者の具現化など、まだ契約したばかりで経験も知識もなにもない彼には、

どうにかして逃げるために魔法を使えるようにならないといけな
いという脅迫観念

ばかりが頭を占め、早く魔法を使えるようにと焦るばかりで思いつ
きもしないのだった。

そして、カードを受け取りながら

「詠唱して魔法を使うって・・・どうやったらいいんだ？俺は魔法
の詠唱なんか知らないし。」

そんな知識もあんまりない。決められた魔法みたいなものがある
のか？」

「マスター、お前は自分のランクと呼び名をしつかり把握するとい
い。」

お前はSランクでありマジッククリエイターなんだ。マジックク
リエイターというのは

魔法創造師であり、魔法を作ることが出来るものだ。たとえば・
・そうだな、簡単な

魔法を作ってみる。魅了の魔法が簡単だからそれにするといい」

「魅了の魔法は、適当にこんな感じかな、って言う言葉を並べて、
最後にチャーム（魅了）って唱えればいいんですよ。それで、
詠唱に使う言葉によって魔法の強さが決まるのです」

「そう、相手に好感を持たせるだけなら、『我に魅惑の恩恵を』く

らいで

かまわないと思う。内容しだいで強くも弱くもなるから、そこら辺は自分で

覚えていくしかない。さあ、やってみるといい。それから、一応ちゃんと

出来ているか私に使ってみるように。簡単に作った魅了程度なら、魔王クラスの

私や熾天使である彼女には効かないから実験台にはいいはずだ」

アスモデウスはそういいながらガブリエルの方に歩み寄り、蘇芳が魔法を創るまで見張りをしようだった。

(適当な言葉・・・って言ったって・・・どんな感じにすればいいのかわかんねえよ！

教えるならもっと分かりやすく教えてくれよな・・・とりあえず、強そうな言葉を入れれば

なんとかなるのか？それとも強そうな意味を持たせればいいのか？)

彼はそんなことを考えながら思いついた言葉を並べて魔法をくみ上げ始めた。

「えーっと・・・鳥よ歌を忘れよ・光よ我を照らせよ・花よその香りを分け与えよ・

神すらも揺らぐほどの魅了の恩恵を・我に与えよ」

そしてアスモデウスに向かい「チャーム！（魅了）」と唱えた。
一瞬まばゆい光があたりを照らしたが、すぐに光は消え元の路地裏に帰っていた。

「そんな感じで魔法を作ればいいよ。今は私に向かって魔法を発動させたけど、

次からはカードを手に持ってそれを見ながら発動させるといいんだ（あれ？おかしいな）。

なんで初心者の魔法なのにこんなにドキドキするんだろ・・・」

「そうですね、今のうちに戦える魔法を作っておいたほうがいいんじゃないですかあ？

もうかなり近づいてきてますよ？」

ガブリエルがそっぴいなながらアスモデウスのほうに歩み寄っていった。

彼女は蘇芳に聞こえないようにアスモデウスに話しかけた。

「アーちゃんいまの魅了、おもいつきり受けちゃったでしょ？」

「うん、初心者の魔法なのにこんなに強く受けちゃうなんてちょっと驚いたよ。

でもこれくらいならまだ大丈夫だから平気だよ。」

「でも魔法を受けてから、少し口調が柔らかくなってるよ？」

「え、そう？そんなつもりはないんだけど・・・でも、彼は魔法の

上達はすごく早そうだね。

「このゲーム・・・勝てるかな？」

そんなことを話している2人を尻目に蘇芳は一生懸命魔法を創っていた。

戦闘用の魔法の詠唱を考えるのに四苦八苦していたが、いろいろ考えた挙句新しい魔法の詠唱を始めようとしていたところだった。

「え〜っと、カードを1枚もって・・・と、

『響け雷・穿て雷光・我が敵に雷神の鎚を振り下ろせ』【ライトニング・ハンマー】」

詠唱を終えたとき、また微かな光とともにカードに魔法が封印された。

魔法が封印されたカードには彼が作った魔法の名前が記され、いつでも発動できるように魔力も充填されていた。

「これで1枚出来た。何人もいるなら範囲魔法があったほうが助かるよな・・・うん。

でも範囲魔法はどうやったらいんだ？とりあえず・・・『我が眼前の全ての敵に』

って入れればなんとかなるかな？よくわからないな・・・まあやってみるか・・・

『響け雷鳴・吹けよ嵐・全てを巻き込み吹き荒れるものよ・

全てを打ち砕く大いなる嵐よ・いまここに来たれ』【テンベレスト轟嵐波濤】

・・・って範囲じゃないじゃん！これってかなり全体魔法なんじゃないか・・・？

まあ、出来る限り使わないようにしよ。さて範囲魔法は・・・と
『吹雪け冰雪・真なる氷よ・我が眼前の全てに・溶けることなき
氷の牢獄を与えよ』

【永久氷獄^{コキョウトス}】・・・と、これも範囲じゃない気がする・・・え
っと範囲魔法って

どう創ればいいんだ？なあアスモデウス、範囲魔法はどんな言葉
を入れて創れば

いいんだ？ちよつと教えてくれよ」

彼は大人数を相手にする魔法の作り方がいまいちよくわからず、
アスモデウスに助言を求めた。

「ん、範囲魔法はね。『我が定める礎の内に』って言葉を入れると
いいよ。

それで魔法を使うときに、魔法の名前を言う前に範囲を指定する
ようにするんだよ。

たとえば『我を中心に半径5メートルで発動せよ』って言ったら、
そのとおりに魔法は発動するからね」

そう答えるアスモデウスに、

「やっぱり言葉が優しくなってるよね。アーちゃんチャームの影
響強く

受けすぎちゃったんじゃないの〜？」

と蘇芳に聞こえないように話しかけた。

「うん・・・思ったより強くかかっちゃったかも。でも悪い気分じゃないよ。」

「これも魔法の影響かもしれないけどね」

2人がそんなことを話していることも知らずに、彼は集中して魔法を作っていた。

今は範囲魔法のための詠唱を考えている最中だった。

「あゝ・・・そうだな・・・」

『吼える雷鳴・神の剣よ・我が定める礎の内に・雷よ降りそそげ』

サンダーレイン
【雷鳴崩】

・・・と、こんなものかな？でもなかなか魔法を作るのも面白いな。

「どんどん作ってみようか！」

彼が熱中して魔法を作っていたとき、ガブリエルが警告の声をかけた。

それは彼を追っていたものがすぐそこまで来ているというものだった。

「マスター、え〜とだいたい後1つ魔法を創り終わったら〜」

そつちの路地から1・2の……5人くらいきますよ。」

「わかった！あと1個か……5人だから……なるべく殺さなくてすむように

したほうがいいな。だったら……

『夜の帳よ・眠りの神よ・我が定める礎の内に踏み込みし・

全ての者を深き眠りへと誘え』【ヒュブノス・ケルム眠神の憂鬱】

……よし、これで狭い路地なら大丈夫だろ」

1話 2 (後書き)

作者は中二病のようです・・・

1話 3 (前書き)

お気に入り登録&評価ありがとうございます。頑張って進めていこうと思います！

気力が続く限りですが・・・

1話 3

「マスター、彼等が来たよ。魔法の準備は出来てる？」

「ああ！いつでもいい！どれくらいでこの路地に入ってくる？」

蘇芳が魔法を創り終わり体勢を整えたとき、彼がいる路地の入り口あたりから

複数の声が聞こえてきた。どうやらもう目の前まで来ているらしい。彼は創ったばかりの魔法を封じたカードを手に持って構えた。

「アスモデウス、十秒前になったら秒読み開始してくれ。

ガブリエルは敵の範囲と人数を教えてくれ。

それから、2人とも姿を見られないようにちゃんと隠れているよ？」

「もちろん！じゃあ十秒前になったらカウントするよ」

「わかりました。え〜つとですねえ、人数は5人で〜範囲は約3メートル

つとところですよ。それじゃ〜初めての戦い、頑張ってくださいいねえ〜」

そういつてガブリエルは姿を消した。アスモデウスは、

「マスター、さっき創った魔法があつたら負けなと思うけど・・・
死なないでね？」

と言って姿を消した。

「わかってるさ。こんなところで死んでたまるかよ！それにしても
アスモデウス、

お前って話し方そんなだったか？もつと固いつていうか
冷たい感じだった気がしたんだけど？」

「そんなこと気にしなくていいの！ほら来るよ！カウント！十・九・
八・・・」

そういつて彼女はカウントダウンを開始した。それを聞いた蘇芳は
あわてて魔法を準備し始めた。

「さて・・・」我が前に直径5メートルの法円として発動せよ・・・
準備はいいぜ。さあ、来い！」

「一・ゼロ！」

その声と同時に路地の入り口に人が入ってきた。それはさっきまで
蘇芳を追いかけていた奴らだった。彼らは蘇芳を見つけると、

「見つけたぞてめえ！もう逃がさねえからな！」

そついいながら5人全員でまとまって近づいてきた。
そのとき蘇芳が魔法を発動させた。

「眠れ・・・ヒュプノス・グルーム！」

その瞬間、蘇芳の前の空間を乳白色の霧が覆った。その霧が消えた
とき、

彼の前には5人の男が倒れていた。彼らは一様に、深い眠りに着き
起きる

ことも無いように見える。その傍らを歩きながら、彼は一体なんで
こんな

ことになったんだろう・・・と考えていた。

事の起こりは3日ほど前のことだった。蘇芳が学校の帰りに立ち寄った

本屋の前にある通りに、小学生くらいの女の子がたたずんでいた。その子供は彼が本屋に入り、そして出てくるまで、おおよそ1時間ほど

その場に佇んだままであった。彼は、迷子かな？と思いをかけてみることにした。

「君・・・どうしたの？ずっとそこに1人でいるみたいだけど、もしかして迷子？」

もしそうなら一緒に探してあげようか？」

「ううん、迷子じゃないよ。でもありがとう。ずっとここにいたけど声をかけてくれたのはお兄ちゃんが初めてだよ」

その子供は、そっぴいながら笑顔を見せた。蘇芳は

（周りには結構人もいるのに誰も声かけないなんて、みんな薄情なやつらだな）

などと勝手な事を考えながら、そのまま話をすることにした。

「そっか、でもどうしたの？お母さんでも待ってるのかな？」

「ここは車の通りが多いから気をつけないとダメだよ？」

「うんわかった。じゃあ向こうに行くね！あ、そうだ！

お兄ちゃん、これあげる。持つてるといいことあるよ」

そういいながら白い布を折りたたんだものを手渡してきた。
蘇芳はそれを受け取り、それが何なのか考えながら

「ありがとう。でもいいの？いいことがあるのなら君が持ってた方が
いいんじゃないのかな？」

と言った。しかし、女の子の答えは無かった。女の子は彼が布を見
ている間に

どこかに行ったようだった。彼は気づかなかったようだが、
女の子は彼以外の者には見えていなかった。見えていなかったと言
うのは

語弊があるかもしれない。正確に言うならば、「認識されていなか
った」

そこに存在はしているのに、眼には映っているのにわからないのだ。
そして彼が布を受け取り、女の子が消える時に彼女は、

「お前は資格を得た」

と言っていた。しかし蘇芳は全く気づいていなかった。

それこそがこの全く理解できない日常の始まりだったとも知らずに、
その布をポケットに入れて帰宅したのだった。

1話 3 (後書き)

今回は導入部なのでちょっと短いです。

1話 4 (前書き)

今回は残酷な描写とか多いです。苦手な人は読まないほうがいいかもしれません。

あと、暗い話になってます。

1話 4

1年前・・・彼は俗に言う「施設」に入っていた。

なぜなら両親を早くに事故で亡くし、彼を育ててくれた叔母もある事件によつて失つていた。それが1年前のことである。

少々裕福だった彼の両親は、自分達に多額の保険金をかけていた。受取人はもちろん息子の蘇芳である。それは自分達がもし彼を残して死んでしまった場合に備えてのことだった。皮肉にもその考えは功を奏し、

彼が普通に生活するには十分すぎるほどの大金を彼にもたらした。

そして、招かれざる客も同時に呼ぶことになった。それは・・・親戚だった。

彼の親が残した多額の保険金を目的に彼を引き取るうと、何人もの親戚を

名乗る者達が死体にたかるウジのように集まってきたのだった。

まだ中学生に上がる寸前で幼かった彼は、大勢の大人たちに滅茶苦茶に

されていく自分の家を見ることに耐え切れなくなり、自分の部屋に閉じこもっていた。そのとき不意に部屋のドアがノックされた。

そこには小さい頃からとても優しく、いつも彼を守ってくれた女性、母親の妹にあたり叔母である「水城 柚華」（みずき ゆか）がいた。

「ゆかおねえちゃん！」

そっぴいなながら蘇芳は抱きついた。子供ながらにこの叔母だけは信用していた。

自分を守ってくれる存在だと感じていたようである。

「すーちゃん大丈夫？怖かったよね・・・でももう大丈夫だよ！」

そういいながら彼女は蘇芳の頭をなでていた。頭をなでられながら泣き止んだ彼は、彼女に子供らしからぬ言葉でお礼を告げた。そして少し恥ずかしがりながら、

「僕がこんなに泣いてたことはナイショにしててね！」

と言った。柚華は微笑みながら、

「だあいじょうぶ誰にもいわないよ。そうそう、それでねすーちゃん。

もし良かったら・・・だけど、お姉ちゃんと一緒に住もつか？お姉ちゃんも

1人暮らしをはじめたばかりだからちよっと寂しかったんだよね。どうかな？」

「いいの？僕、お姉ちゃんと一緒にいい！」

そういいながら満面の笑みを浮かべる蘇芳。その笑顔を見ながら柚華は、

まだ社会人になったばかりだと言うのに蘇芳を引き取る決意をした。亡き姉の子であり大事な弟のような少年を、自分の手で出来る限り

守っていこうと決意したのだ。そのとき当然周りの親戚を名乗る連中は反対した。

『高校を卒業したての若い女に何が出来る』

といってあざ笑いもした。しかし彼女は一步も引かずに少年は私が引き取る

と言いつづけた。そして、少年自身が彼女と一緒にいたいといい始めたことで

一応の収まりがついたのだった。そして蘇芳は柚華とともに二人暮らしをはじめた。

最初は戸惑いも多かったが、1年・・・また1年と過ぎるうちに、もう他での暮らしは考えられなくなってきていた。

しかし、彼が高校に入学したばかりの時に・・・あの事件が起こった。

それは、連続レイプ殺人事件だった・・・犯人は数人の若い男達で、

いずれの事件も対象にされたのは、若い一人暮らしの女性ばかりだった。

その日、たまたま日直で早めに学校へ行くこととしていた蘇芳は、いつも通り柚華を起こし食事の用意をしてから家を出ようとしていた。

「それじゃ行ってくるよ。姉さんもちゃんと戸締りをしてから出かけるないとダメだよ？」

最近物騒らしいからさ。僕も早めに帰ってくるようにするからね？」

「うん、いつてらっしやい・・・あゝそうそう、すーちゃん今日は早く帰ってねえ・・・」

「だから早めに帰ってくるって言ってるし・・・ほら！ちゃんと起きて！」

「今日も普通に仕事なんだろ？遅刻するよ？」

そついいながら自分の荷物を掴み玄関へと急ぐ、ほぼ毎朝のように繰り返される事だが、蘇芳は毎日が充実していると感じていた。そして、いつも通り自転車に乗り学校へと向かった。

その日はちょうどテストの最終日と言うこともあって、午前中だけの授業だった。

キーンコーンカーンコーン・・・

「よしっ！終わり終わり！それじゃあ僕は用事があるから先に帰るよ。」

「みんなはどうするの？」

そついいながら蘇芳はかばんに教科書やノートを片付けた。そして数人の友人とともに帰路へつく。悲劇の時間まであと約1時間・・・それは、蘇芳が家にたどり着いてから起こった。

「ただいま！姉さん帰ってる？」

返事が無かった。玄関には彼女の靴があり、彼女の性格では玄関においておく靴は常に1足にしていた。その他の靴はいつも靴箱にきちんといれてあり、履くときだけ出して使うと言う状態だったので玄関に靴があると言うことは家にいるということを表していた。

「姉さんいないの？おかしいな、靴があるからいるはずなんだけど。お風呂にでも入ってるのかな？」

玄関を抜け、姉の部屋の前に差し掛かったとき暴れるような物音を聞いた彼は、

「姉さんいるの？返事がないからいないのかと思ったよ。
姉さん？返事が無いな・・・ちよつと入るね」

そついいながら彼が部屋に入ろうとしたとき、中から悲鳴と物音が聞こえた。

「すーちゃん入ってきちゃだめえ！早く逃げて！」

その声と同時に姉の部屋のドアが開かれ数人の男に囲まれた。

「なんだよお前ら、なんで姉さんの部屋から出て来るんだよ」

「やめて！お願い、弟には手を出さないで！」

その声を聞き、彼が姉の方を見ると・・・彼女は部屋の中央付近で
全裸
にされ暴行を受けていた。

「なにやってんだよ！姉さんを放せ！」

「黙れガキ・・・死にたいか？」

蘇芳が声を荒げたとき、周りにいた男の1人がそういいながら
蘇芳の首筋に刃渡り20センチほどのナイフを突きつけた。

「やめて！お願い・・・私にはなんでもしていいから・・・弟には
手を出さないで！」

そしてそのまま、蘇芳の目の前で彼女は陵辱された・・・
その間蘇芳の首筋には、くだんのナイフがあててあり見ることを強
要されていた。

「すーちゃん見ないで・・・見ないでえ・・・」

姉はそう言って泣きながら犯されていった・・・
全部で6人いた男たちは自分達が満足すると小声で相談し始めた。
蘇芳は何とか姉だけでも逃がせないかと行動を起こそうとしてみた
が、
常に首筋にナイフがある状態で、しかも袖華はすでに正気を保って
いないほど
ポロポロに陵辱されていたので逃がすことも出来なかった。
そして男たちは、蘇芳の腹部にナイフをつきたてた。
その光景が眼に映った袖華が正気を取り戻し、悲鳴を上げた。
暴行を受けポロポロになった体を精一杯動かして蘇芳の傍にたどり
着いたとき、
蘇芳は出血はひどかったがまだ意識があった。

「ねえ・・・さん・・・守れ・・・なくて・・・ごめんね」

「ううん！スーちゃんのせいじゃない！お願い死なないで・・・」

そういつて涙を流しながら抱きしめてくる袖華の体は、
どこか頼り無げで震えていた。そして・・・男たちがトドメを刺そ
うと

ナイフを振り上げた時、窓の外からパトカーのサイレンの音が聞こ
えた。

「ちっ・・・ずらかれ！」

そういつて逃げようとする男たちの1人が蘇芳と袖華のほうに歩み寄ってくる

「前からめえは気に入らなかったんだよ」

と、言いながら蘇芳にナイフを突き刺そうとした。

「ダメエ！」

朦朧とする意識の中で蘇芳が見たものは、男の顔を隠していたマスクが剥がれ

見たことのある顔が出てきたことと、姉の胸に吸い込まれるように柄まで埋まった

ナイフだった。男は顔を見られる事はなかっただろうと思いつつも逃走しようだった。袖華は、20センチものナイフを右胸に突き刺したまま

蘇芳の傍に倒れこんだ。その姉の姿を見た瞬間、蘇芳の意識は急速に覚醒していった。

「姉……さん……？姉さん？そんな……嘘だ……いやだ……姉さん！」

そついいながら全裸の姉を胸にかき抱き泣きながら呼び続けた。袖華は、口の端から血を流しながら

「すーちゃん、大丈夫・・・？」

と、聞いてきた。そんな柚華に

「僕のことは気にしなくても大丈夫だよ！それより姉さんの方が重体なんだ！

お願いだよ・・・死なないで・・・死んじゃいやだよ・・・ゆかおねえちゃん！」

そういつて蘇芳は泣いていた。そのとき玄関がノックされ、

「すみません、警察のものなんですが。悲鳴が聞こえるとの通報があつたのですが、どうかしましたか？」

と言う声が聞こえた。

「助けて！おねえちゃんが・・・死んじゃうよ・・・いやだ・・・おねえちゃん・・・いやだよ！」

蘇芳がそういつたとき、玄関の扉が開かれ2人の警官が入ってきた。

彼らは部屋の惨状を見て、すぐに無線で応援と救急車を呼んだ。しかし袖華の傷は、誰が見ても手遅れなのは明らかだった……

「すーちゃん……聞いてる？あのね……おねえちゃんは幸せだったよ？」

「いままですーちゃんと暮らせて……楽しかったよ……」

「そんな……今までなんて過去形にしないでよ……もっと一緒にいられるよ……」

「だから……だからそんなこと言わないでよ！」

「ごめんね……すー……ちゃん……ごめん……ね……」

その言葉を最後に彼女は意識を失った。それから救急車が来るまで蘇芳は

彼女の名を呼び続けた。だが、救急車が到着し救命士に促され車に乗り込むと

同時に緊張が薄れ意識を手放した。

1話 4 (後書き)

過去編・・・というか、主人公の過去です。

自分の文章力がないのが思い知らされています・・・orz

もしよければ感想などいただけるとやる気が出ます。

1話 5 (前書き)

．． やっぱり書くのが難しいです。どっすねば上手くなれるんだろっ．．

眼が覚めた蘇芳は周囲の様子を見渡した。

そしてそこが病院であることに気づくと、まだぼんやりとする頭を振りながら

体を起こそうとしたが、そこで腹部に激痛が走ることに気がついた。その激痛により意識が鮮明になると同時に姉のことを思い出した蘇芳は、

痛む腹部を押さえつつ同じ病院に運ばれているはずの姉を探すためにベッドを降りようとした。そのとき扉が開き医者らしき白衣を着た人物が部屋に入ってきた。

「おお！意識が戻りましたか！」

「先生！姉は・・・僕と一緒に運ばれてきたはずの姉さんは大丈夫なんですか！」

「水城柚華さんの・・・ご家族の方ですか？」

「はい弟です！」

「そうですね・・・お姉さんの事なのですが、病院に到着するまでに血を

流しすぎていました。可能な限りの手は尽くしました・・・しかし誠に残念ですが・・・」

そういうと、医者は一礼し去っていった・・・しかし蘇芳は未だに

姉の死が信じられず医者が去っていったことにも気づかなかった。だが霊安室に通され冷たくなった姉の体に触れた時、
気力を全て失ったように床に崩れ落ちた。

それから約1週間、彼は無気力に過していた。

その後退院したが学校にも行かず、部屋からも出ない、そんな生活を続けていた。

しかしそんな生活も長くは続かなかった。

柚華の葬儀をし、遺産・・・という段階になると、また聞いたこともないような

親戚が沸いてきたのだ。彼らの目的は柚華が自らにかけていた生命保険の金だった。

もちろんその受取人は蘇芳になっていた。彼にとって姉との暮らしは、

裕福ではなかったがとても充実したものであった。それゆえ両親から受け継いだ

遺産にも手をつけていなかった。そして、彼の財産はそういった親戚たちの

格好のエサとなったのだった。しかしそういう大人達に嫌気がさした蘇芳は、

全ての親戚からの申し出を断り、自ら施設に入ることにした。

彼はその施設に多大な寄付をし、完全な個室を用意してもらった・・・

・
全ての生活をその場のみで行えるような部屋を。

それから1年たち、彼は高校2年生になっていた。

姉の死から彼の性格はかなり変わった。昔は穏やかで少し消極的で、そしていつも笑顔だったが、1週間ほど学校を休み、それから出てきた時には

すでに変わっていた。激しく積極的になった。それでも笑顔は変わらなかったが、

それはどこか影を帯びた笑顔であった。一番変わったのは、武道を始めたことだった。

柔道・剣道・空手 e t c e t c . . .

それはどこか自分を痛めつけているように見えていたという。

持ち前の運動神経も手伝い、程なく上達してきた彼だったが・・・決して満たされることはなかった。

『まだ足りない、もっと強くないと』

と貪欲に強さを追い求めていた。だが持ち前の人当たりのよさは失っておらず、

昔より社交的になり、誰とでもにこやかに話すようになっていた。しかしそれは『誰も自分の中には踏み込ませない』と言う心の現われだった。

それから1年たち、3年生になった彼はいつものように本屋に立ち寄った。

そこであの少女に出会い、白い布・・・【簡易召喚陣布】を受け取ったのだった。

その布を受け取った日に自室に戻ると、パソコンにメールが来ていた。

それは「新しいゲームのモニターになって欲しい。このメールは全世界の人間に

ランダムに送信している」と言うものだった。

そして彼は、そのゲームに参加することにした。

それが世界の命運を分ける「神のゲーム」だと言うことも知らずに、蘇芳はモニターに登録することにし、届いたメールに返信すると、一旦パソコンの電源を切った。それは食事をしようと思っただけだった。

自室のキッチンに向かい、手早く食事を用意していると、パソコンにメールが届いた音がした。電源が入っていると、メールが届いたときに音がして知らせてくれるように設定していたためだった。

蘇芳は

（パソコンの電源って切らなかつたかな？）

と少し疑問に思いながらコンロの火を消し、用意したばかりの食事を持って

パソコンのところに戻った。新しいメールにはあるホームページのURLが書いてあるだけだった。軽い食事を取りながらそのURLにアクセスしてみると

【終末のゲーム】

というタイトルのゲームだと言うことが分かった。

そのサイトを見てみるといくつかの質問があり、それに答えることで自分が扱える魔力が増えると言うことが書いてあった。

それらの質問に全て答え送信を押すと、最後にこういう質問が現れた。

それは【力が欲しいか?】と言うものだった。

蘇芳はその質問に対し、迷うことなく欲しいと入力した。

すると、サイトの一番上に

【あなたの現在魔力は30です】

という表示と、

【力が欲しい者は魂を捧げよ】

という一文が現れた。蘇芳が困惑していると、

【下の空欄に1週間以内に殺したい相手の名前かイメージを書き込め・魂が汝の力となる】

という文が新たに表示された。

蘇芳は迷うことなくその空欄に「犯罪者」と言う文字を書き込んだ。すると

【そのイメージはすでに使われている物です。得られる魔力は少量になります】

という文字が現れた。そこで

「世界中で殺意を持って人を殺したことがあるもの・それらを指示したもの・

テロリスト・それに直接的なかかわりがあるもの・それらを支援しているもの」

と書き込んだ。すると、

【該当する人数はおよそ20億人です・あなたの現在魔力は200

万です・

【契約できる相手のランクはSです】

という文が現れた。蘇芳は

「どうせ冗談だろ、それにゲームのモニターと言う話みただし・
・問題ないだろ」

と思いそのままENTERキーを押した。しばらく見ていると

【汝が契約できるのは・・・】

という表示が現れ多数の天使や悪魔の名前が表示された。

その表示を見ていると見覚えのある名前があった。

それは前に読んだ小説に書いてあったものなのか記憶が定かではな
かったが無性に

興味がわいていた。そこで蘇芳は「アスモデウス」を選択した。す
ると

【もう1名選べます】

という文が現れた。すでにアスモデウスをも選択していた蘇芳は

「魔王を選んだ後に天使っていうのも面白いかもしれないな・・・」
と1人つぶやき今度は「ガブリエル」を選択した。送信を押ししばら
くすると

【魔法のタイプはどういうものがいいか】

という質問が現れたので、カードで魔法を使えたら楽しいかもしれない
ない・・・

と思いながら「カードに魔法を込めてカードを使って戦う」と書き込み送信を押した。
しばらくすると

【登録ありがとうございますございました引き続きサポートのものより説明を受けてください。

それでは死なないように頑張ってください】

という一文が表示され、自動的にパソコンの電源が落ちた。

蘇芳は気付いていなかったが、パソコンのコンセントは繋がっていなかった……

1話 5 (後書き)

世界人口を70億と換算しての20億という数になっています。多すぎるかなーとも思いましたが、世界の約3分の1が突然死したら世界の常識やあり方も変わるだろう・・・ということやっつてしまいました。

1話 6 (前書き)

今回は2話との繋ぎの部分なので結構短いです。

なんとか1話を終わらせることが出来た・・・と思います。

これからも頑張ります！

1話 6

「私を呼べるとは、お前かなり殺したな？」

「そうですね〜わたしたち2人を同時に呼び出すなんて普通の人にはできないですよ〜」

蘇芳は驚き、振り向いた。するとそこには2人の女性が立っていた。

1人は腰まである黒いストレートの髪を持ち、赤い瞳で、蘇芳よりも背が高く、スタイルも良かったが、なぜか黒いチャイナドレスを着ていた。

もう1人は、肩くらいまでのウェーブのかかった金髪で、瞳の色は緑、

彼女も蘇芳よりも背が高く、とてもスタイルが良かった。

しかし彼女の格好は神話に出てくるような女性の姿、いわゆるローブのようなものを身に着けているだけだった。

「あんた達は誰なんだ。俺の部屋には鍵がかかっていたはずだが・
・どうやって入った」

「失礼なヤツだなお前は。自分で呼び出しておいて文句を言うのか」

「アーちゃん〜いきなりなんだから驚くのは仕方ないですよ〜
だから先に自己紹介しましょ〜？じゃ〜わたしから〜はじめまし

て

わたしはガブリエルと申します。マスターがわたしを選んでくれたこと、

とても嬉しいですよ。」

「私はアスモデウスだ。お前が契約相手に私と彼女を選んだからここに来た。

それから入り口から入ったのではなく、そこに落ちている簡易召喚陣布を

通ってきた。とりあえず選んでもらったことには礼をいう。ありがとう。」

2人の自己紹介を聞いていた蘇芳は呆然としていた。混乱した意識の中で

『こんなことはありえない。これが本当だったら・・・さつき書いた殺したい相手ってというのは本当に死んでしまうのか?』
と考えていた。

「マスター?どうかしたんですか?」

「おい、いまから魔法についての説明をするからちゃんと聞いていろよ。

しっかり覚えておかないとすぐに殺されるぞ。」

そんな二人の言葉を聞きつつ

「悪い・・・頭が痛いんだ。話は明日にしてくれ」

と言って早々にベッドに入った。

「それは大変ですね〜それじゃ〜お話は明日にしよっか〜」

「まあ、今日はゆっくり寝るといい。明日からは過酷な生存戦争がはじまるからな」

そんな言葉を聞きながら、蘇芳の意識は闇に飲まれていった・・・

翌日眼が覚めるといつも起きている時間を超え、学校に遅刻しそうな時間だった。

彼は自分の部屋にいる2人に気づかないまま

『昨日のことは夢だった』

と思い込んで学校へ急いでいた。そのとき

「起きたら話を聞くんじゃないのか？」

「あ〜マスターおはようございます〜」

という声が聞こえた。周りを見回したが姿が見えなかったので、

幻聴かと思いい無視していると。

「話しかけているのに無視する気が。いい度胸だなお前」

「まあまあアーちゃん〜抑えて抑えて〜マスター今からお話聞いてもらえますか〜？」

姿の見えない2人の声に

「帰ってから聞く！今は邪魔をしないでくれ！」

というと全力で学校へ向かって走り始めた。

1話 6 (後書き)

と、いうことで1話終了です。次回からは2話になります。
ご意見・ご感想などお待ちしています！

2話 - 『契約と想い』 (前書き)

此処から2話が始まります。うまく書けるといいんですが・・・

2話 - 『契約と想い』

それから・・・学校へ行く間に他の魔術師に見つかったのである。そして話は章の始めに戻り、蘇芳は敵に追われていたのだった。

彼は追って来ていた5人を眠らせ、その横を通りながら逃げ出した。

「マスター、そっちに行くと一緒に追いかけてきていた残りの2人がいるよ。」

「こっちに逃げたほうがいいよ！」

アスモデウスがそう言い逃げ道を示すと、残りの2人に見つからないように

他の路地に逃げ込んだ。それから学校へ何とかたどり着いた蘇芳だったが、

まだ受難は終わっていないようだった。彼のクラスの中にも今回の騒動に

巻き込まれて死んだ者が幾人かいたのだ。どういった理由でそうなったのかは

分からない・・・しかし彼のクラスでも5名が、朝・・・布団の中で冷たくなっていたそうだ。

それから1週間は学校も、自分の回りもゴタゴタしていてそのことまで

気が回らなかつた蘇芳だったが、契約してから1週間後の朝のホームルームの

時間に今回の騒動でどういうことが起きているのかを知ることになる。

そして蘇芳は事の重大さをはじめて認識した。担任の教師が言うに

は、

「原因不明の伝染病で多くの犠牲が出ている、なにか少しでもおかし
しいと

思うことがあつたならすぐに自分に（担任）相談するように、
それからできれば1人での外出は控えるように」

とのことだった。幸運にも天界・魔界の両軍に見つかることなく
帰宅した蘇芳は、自室のパソコンデスクの前にある椅子に座り、
ぼんやりとしながら担任の言葉を思い出していた。

．．．．．自分が戯れで書いた条件で人が死んだ．．．．．

それだけ．．．その残悔だけが彼の胸を占め、重圧に潰されそうだ
った．．．

そのとき不意に彼の頭が柔らかいものに包まれた。

「マスター．．．そんなに落ち込まないで。大勢の人が亡くなった

けど、

それはマスターのせいじゃないんだよ？全ての責任はこのゲームを始めた

神にあるんだから・・・だから落ち込まないで・・・」

そういいながら蘇芳の頭を抱きしめていたのはアスモデウスだった。彼女ははじめ人間など全く興味がなかったが、この1週間の間蘇芳を見ているうちに、その考えを変えていた。蘇芳は毎日のようにアスモデウスとガブリエルに教わって魔法を勉強していたし、新しい魔法の作成にも力を入れていた。そして何度か戦いも経験していた。

そのさなかにこういうこともあった・・・敵が放った魔法が蘇芳から反れアスモデウスの方に向かったのだ。しかしアスモデウスは魔王という

とても高位な魔族であり、その程度の魔法は防ぐ必要すらなかったのだが、

そんなことは知らない蘇芳は自分の身を呈して彼女を守ろうとし軽い火傷を負ったのだ。怪我の功名といえるのは、

そのときに怪我をしたことよって【再生】の魔法を考えたことだった。

だが蘇芳は夜になると毎日のようにうなされてもいた。

それは姉の死の瞬間を何度もフラッシュバックのように夢としてみてしまうことによるものだった。そんな時にアスモデウスが彼の手に触れると、

強く握り返した後、安心したように手を握ったまま眠るのだった。

そんな蘇芳を間近で見っていた彼女は、彼のことをとても好ましく思っていた。

それは魅了の魔法のせいもあったかもしれない、しかし彼女の心は明らかに

蘇芳に傾いていた。だが彼女自身この気持ちが魅了のものなのか自分の心のものなのか分かっていなかったので蘇芳にこう告げた・

「マスター・・・この間作った【デイスベル】を私にかけてもらえないかな？」

どうしても確かめたいことがあるんだ・・・ダメかな？」

傷心の蘇芳に対して今言うようなことではないかもしれないけれど、今を逃すと自分の気持ちを知る機会が来ないような気がしたアスモデウスは、蘇芳を胸に抱き締めたままそうつぶやいた。その言葉に対して蘇芳は、

「なぐさめてもらっちゃってごめん・・・アスモデウス。マスター失格だよな俺・・・絶対もつと強くなるから・・・見捨てないで傍にいてくれよな」

そういいながら苦笑した。その顔を見ながら彼女は動悸が早くなるのを感じた。

そして傍にいてくれと言われたことに対して素直に喜んでいる自分に驚いた。

そんな自分を不思議な気持ちで客観的に眺めていると、彼女の抱擁から

抜け出し前に立った蘇芳が魔法を使う準備を整えて眼で促した。

そしてアスモデウスが軽く頷くのを確認した蘇芳は詠唱を開始した。

「じゃ、いくよ。」

『全ての魔法の・加護よ・恩恵よ・呪よ・戒めよ・我が命ずるま
まに全て失せよ』

「ディスプレイ……解呪！」

その言葉とともにアスモデウスは淡い光に包まれた。

それは魅了の魔法と違い、清々しく爽やかな光だった。

その光に包まれている時アスモデウスは目を閉じた。

そしてその光が消えたと感じたとき、アスモデウスは自分の心にか
かっていた

魅了の魔法によって生じる人間では感知できないほどの心の霞が
消え去ったことに気づいた。

（これで魅了の効果はもうない……だから自分の本心がわかるよ
ね……

私は本当にマスターの事を好きなのかな……それとも魅了の魔
法の効果で

そう思い込んでいただけなのかな……でもこの気持ちが嘘だっ
たら

私はどうすればいいんだろう……）

そんなことを考えながらアスモデウスは蘇芳の顔を見るために
眼を開こうとした……しかし自分の心に自信が持てずに眼を開く
ことに

躊躇してしまっていた。

「アスモデウス……どうしたんだ？俺の魔法はどこか間違っていたのか？」

あんなに一生懸命に教えてくれたのに俺は間違ったのか？」

アスモデウスが戸惑いつつ眼を開けずにいると、
蘇芳が少し心配そうに話しかけてきた。

その言葉に答えようと、そして蘇芳の顔をしっかりと見ようと
眼を開いたアスモデウスが見たものは、自分の使った魔法のせいで
具合が悪くなっただんじやないかと心配する童顔の、
自分より少し身長の低い少年の顔だった。

「なあアスモデウス。俺はミスをしちゃったのか？大丈夫なのか？」

彼がそう声をかけるまでアスモデウスは自分が少年の顔を見つめた
まま
動かなかったことに気づかなかった。そして……彼女は何も言わ
ずに
心配そうな蘇芳に近寄ると、おもむろに………抱き締め
た。

(間違いない……私はやっぱりマスターの事が好きなんだ！)

それは思考にかかった霧が晴れたような感覚だった。

「お・・・おい！なんだよ！急にどうしたんだよアスモデウス！」

そういつてじたばたと暴れる蘇芳をしばらく抱き締めたまま、アスモデウスはある一言を言おうと思いい口を開こうとした。そのとき、

「アーちゃん、抜け駆けはズルいですよ？」

と、背後から急にガブリエルの声がかげられた。アスモデウスはあまりに驚いたため、無意識に蘇芳をギュッと抱き締めてしまった。

「ギ・・・ギブ・・・！へ・・・る・・・ぶ・・・！」

そんな断末魔の声を残しつつぴくぴくと痙攣しながら・・・その圧力で蘇芳が落ちた・・・

「アーちゃん！早く離して離して～！マスターが死んじゃいますってば～！」

「急いで～～～！」

「え？・・・っ・・・きゃああああああ！すおー！」

どこまでも不運な蘇芳だった………チーン(合掌)

2話・『契約と想い』（後書き）

いかがだたでしょうか？最後に微妙にギャグ調にしてみました。

こういう書き方をするのは始めてなので、おかしいところや誤字脱字等

在りましたら、教えていただけると嬉しいです。

2話・2(前書き)

ちよつとイベントスタッフで他県にいつていたので更新できません
でした。

ちよつと忙しくなるので更新速度が遅くなるかも知れませんが
完結できるように頑張ります。

2話 - 2

気絶している蘇芳を布団に横たえ、アスモデウスはガブリエルに

「急に声をかけるなんてひどいよ・・・リル。いるならいるってちゃんと教えてくれないと・・・
すっごく恥ずかしかったんだからね！」

「そうですか〜でもわたしもあそこであのことを言われるのはちょっとずるいな〜

なんておもっちゃったんです〜。それに〜マスターのことが好きなのは

アーちゃんだけじゃないんですよ？わたしだってちゃんとマスターの事が

好きなんですから〜抜け駆けは許しませんから〜」

そっぴいながらにこにこといつも通りの笑顔に崩さないガブリエルに、

「わかったよ・・・でも最初に言うのは私にさせて欲しいな・・・
ダメかな？

自分から・・・したいなんて思ったの初めてだからどうしても言わせて欲しいんだ」

「いいですよ〜そのかわり〜わたしもマスターにきちんと気持ちを伝えますよ〜？」

それに、実を言うとわたしも始めてだったりするのですよ。だからちよつとときどきしますねえ。」

そういう彼女の表情はいつもと全く変わらなかった。そんなガブリエルを見ながらアスモデウスは

「マスターになら・・・私の真名を教えてあげてもいいかもしれないね・・・」

でも私はしたことないから・・・うまく出来るかどうか心配だよ・・・
リルはしたことがあるの？」

「わたしだつてありませんよ。それでもマスターをお慕いしていますから

かまわないかな。なんて思っちゃってるのですよ。」

そういつて微笑む友人の顔を見ながらアスモデウスは、蘇芳が目覚めたらなんていおうか・・・と悩んでいた。しかしその悩みを切り裂くように

「お前ら・・・さっきからするだのはじめてだからわからないだの何の話してるんだよ・・・聞いているこっちが恥ずかしくなるじゃないか」

「マ・・・マスター！いつの間起きてたの！っていつか今の話聞いてたの?!」

いつから?!?!?!?」

「いつからって・・・『私の真名を教えてあげても』っていうことあたりかな?

そういやさ、2人が言い争ってるのは珍しいよな・・・
なんて思っただけだ。一体なにを話してたんだよ」

「何をって・・・それってほとんど最初から聞いてるようなものじゃないかー!

なんで寝た振りなんかしてるんだ!・・・・・・・・・・ばかあ」

そういつて顔を真っ赤にして怒るアスモデウスをなだめつつ、
蘇芳にガブリエルが切り出した。

「マスター、わたしたちが話してるの聞いてたんですよねえ?」
「だったら何のことを話してたのかわかりますか?」

「いや・・・俺もボソボソとしか聞こえなかったからさ。
何かをすとかしたいとか言ってるのは聞こえたんだけど何のことやら」

さっぱりわかんねえよ?それって俺にも関係あるのか?」

「そうですね、マスターにしか関係ないっていうか、
わたしたち2人とマスターに関係あるっていうか、その、えっと」

そっぴいながら心持顔を赤くしてガブリエルが

アスモデウスのほうを見ながら言いよんどんでいると、

「あのね……マスター……私と……えっ……と……
本契約……してもらえないかな」

「アーちゃんずるいです〜わたしじゃなくってわたし達ですよ〜」

そういうと2人は真っ赤になりながら蘇芳を見つめていた。

（ガブリエルは少し頬を染めている程度だったが）

蘇芳は本契約と言われても、今までの契約と何が違うのか全く分
らなかつたし、

本契約の意味も分かっていなかったなので少し疑問に思いつつ

「本契約？それってしてたほうがいいのか？っていうか今までの契
約じゃダメなのか？」

と聞き返した。すると真っ赤になってどうしても言い出せそうもない
アスモデウスに変わってガブリエルが、本契約について蘇芳に説明
し始めた。

その説明によると、天使・魔族共に一度結ぶと契約者である人間が
死ぬまで

解約されることがない。いうなれば人間の結婚のようなものである。
しかし、この契約には離婚と言う概念は通用せず、

お互いが生きている限り消えることのない絶対の絆となるというも
のだった。

しかも本契約は人間と天使・魔族双方の合意の下に出ないと成立せ

ず、
またその方法も合意の上でないと到底不可能なものであるというも
のだった。

「え〜つと・・・つまり俺にお前ら2人と結婚しろ・・・っていう
んだな？・・・マジで？」

「イヤなの？絶対にいやな思いはさせないから！だから・・・だか
ら私と本契約して・・・お願い・・・」

そういつてうつむくアスモデウスに蘇芳は言葉を失った。

いままで1週間毎日のように顔を合わせて四六時中一緒にいたのに
(学校は不測の事態で閉鎖された)

彼女のこんな頼りなげなしくさは見たことがなかったからだ。姉の
こともあり、

女性に対しては優しく接しようと考えていた蘇芳は、
アスモデウスのそんな姿を見てたじろぐことしか出来なかった。

「マスター、アーちゃんもこういつてますし〜わたしも頑張ります
から〜」

「本契約していただけませんか？」

「仕方ないなあ・・・それで・・・本契約っていうのはどうや
つてするんだ？アスモデウス」

その言葉を聞いたアスモデウスは、とても嬉しそうに顔を輝かせた

が・・・

本契約の方法のことを思い出した瞬間に、一瞬で顔を真っ赤にさせてうつむいてしまった。

そのしぐさを不信に思った蘇芳はもう一度聞くことにした。

「アスモデウス？本契約の方法って言うのを教えてくれないと、俺にはどうしていいのかわかんないぞ？なんでそんなに赤くなるんだよ・・・」

もしかしてすごく変な方法なのか？」

「マスター、本契約の方法はですねえ、いろいろあるんですよ？」

問い詰めようとしていた蘇芳の言葉をさえぎり、ガブリエルが助け舟をだした。

その言葉を聞き蘇芳は、ガブリエルに方法を聞いてみようと思った。

「なあ、天使も悪魔も本契約の方法っていつのは同じなのか？」

「え、つとですなえ、本契約の方法は一緒ですよ」

それに、天使と魔族の方の違いは、神様を信望しているかどうかだけなので」

悪魔ってという言い方はして欲しくないと思いますよ？」

別に悪いことばかりをしてるわけでもないですよ」

できれば『魔族』って言ってあげた方がいいですよ」

「へー、そうなのか・・・まあ、とりあえず契約の方法は一緒なんだな？」

だったらその方法ってヤツをちゃんと教えてくれよ。

なんかお互いの合意が不可欠とか言ってたけどさ・・・
一体どんなことをするんだ？何か難しいことなのか？」

そっついながらアスモデウスのほうを見ると一瞬眼が合ったものの
すぐに目をそらされた。

蘇芳の眼の錯覚でなければ、彼女の顔は酒でも飲んだかのように真
っ赤になっていた。

2話・2（後書き）

次回彼女達が恥ずかしがる本契約の方法が明かされます。

18禁な展開になるかもしれないので、その部分がなくても話が繋がるように

うまく書く努力をしようと思います。

18禁部分はアルカディアのXXX板、もしくはノクターンの方に載せるようにします。

2話 - 3

その様子を不審に思いながらガブリエルに眼を向けると、いつものように微笑みながら・・・しかしどこか恥ずかしそうに本契約の方法についての説明を始めた。

「あのですねえ〜本契約の方法はいくつもあるんですけど〜
どんな感じのものがいいですか〜？時間はかかるけれど一番簡単なのは〜

2人とも全裸で抱き合う〜って言う方法ですけど〜」

「・・・は？いや・・・全裸って・・・意味わかんないし！」

「え〜つとですね〜マスターの霊子情報と〜DNAの情報をわたしたちが
覚えなといけないんです〜それで〜霊子情報を記憶させるためには〜

密着しておくことが一番重要なのですよ〜」

そんなことをいいながら、ガブリエルはちょっと恥ずかしそうに苦笑しながら言葉を続けた。

「でもですね〜そうやって抱き合う方法だと〜

最短でも丸3日は密着していないといけないんですよ〜」

「え？いま3日って言ったか？全裸で！？ず〜っと!?!?」

「はい、ずいっとですよ。3日間全裸でずいっと抱き合っていないといけないんです。」

その言葉を聞き蘇芳は絶句した。お互いに同意しないとイケないと言ったこと

だったので多少のことは覚悟していたつもりだったが、3日間ずっと・・・しかも全裸などとは露にも思っていないからだ。

そしてガブリエルが続けた。

「それでその次の方法がキスですね。」

「キス・・・か・・・そっちは少しはまともそうだな・・・。」

「それがですねえ、えいっとこっちでいうところの」

・・・あ、こっちっていうのは人間界っていうことなんですけど、
ディープキスとかフレンチキスっていう」

舌を絡ませるようにする大胆なキスなのですよ。」

キスくらいは予想の範囲内だった蘇芳は、驚かずにガブリエルに尋ねた。

しかし彼女の答えは予想の斜め上あたりをいくものだった。

「なあガブリエル・・・さすがにキスならすぐ終わるんだろう？」

「え〜と〜・・・24時間以内に〜合計して5時間分・・・
ってことになってます〜」

「ちょっとまって」

「はい〜？なんでしよう〜？」

そついいながら右手の手のひらで目を隠すように自分のこめかみを
押さえつつ蘇芳が言った。

「どこから突っ込んだらいいか迷ってる・・・とりあえず・・・」

一体誰がそんなふざけた条件を考えやがったんだ？それから・・・
契約方法ってどれでも何時間もかかるのか？」

「え〜と〜契約方法は〜2代目の神様がお決めになったそうです〜
ちなみに〜今の神様は5代目様となっておりますよ〜。それから〜時
間ですけど〜」

早めに終わった方がいいですか〜？」

そついつて軽く首をかしげるガブリエルに、蘇芳は軽い頭痛を覚え
ながらこう返した。

「そりゃそうだろ・・・っていつかもっと簡単な方法はないのかよ
・・・
だいたいなんでそんな方向へ持っていていこうとするかなあ・・・」

「それはですね、昔はそんな規定はなかったそうだけれど、人間と契約する魔族や天使がすごく多かったそうなのですよ。そのせいで、人間界の戦いのバランスが崩れて、一度滅びかけたそうなのです。」

でも実際は、あまりにも戦いばかりしてる人間に怒った神様が、ノアって言う人だけ残して大洪水で殺しちゃったそうなんですけどね。」

「……って、いかさ、そういう重要な秘密っぽいものをそんなサラッと話しちゃっていいのかよ……」

「あ、あの……マスター……それでね、本契約の方法なんて、ど……」

そういつてアスモデウスが話しかけてきた。さすがに蘇芳がずっとガブリエルとばかり話しているのが気になったようだ。

「ん？どうしたアスモデウス。もっと簡単な方法があるのか？」

「えっと……簡単なのは簡単なんですけど……速さって、いかさ、かかる時間はマスター次第って、いか……」

「あのですね、アーちゃんにお任せしてると、

説明だけで数時間かかりそうなので、はっきり言いますね。」

一番確実に簡単な方法は、性交です。」

聞いた瞬間蘇芳は固まった。心配したアスモデウスが彼の服のすそ

を軽く引き

「マスター？大丈夫？」と声をかけるまで数秒間はおもいつきり固まっていた。

「………はい？」

「ですから性交です。他の言い方にするとうえつちとか。セックスとか。交尾とか。メイクラブとか。他にも」

「もういいって！それ以上いうな！」

「え。つと。それから。わたしたちにとって。すごく重要なものなんですけど」

本契約をするためにエッチをしちゃうと。絶対に解約できなくて。文字通り身も心も捧げる。って感じになるんです。

それに。魔王クラスの王族の方や。わたしのような熾天使は。プライドが高くて気が強い方が多いので。無理やり契約しようとするとう

魔法などで撃退されるのがわかってますから。

そのために『お互いの同意が必要』っていったわけで。同意してなかったら人間の方が殺されちゃいますから。」

(アスモデウスが思いつきり言いよどんでた理由が分かるな……)

そう思いながら恥ずかしがる様子を見せずに言うガブリエルを見て蘇芳のほうに恥ずかしくなるのだった。しかし、その後のガブリエルの言葉に

衝撃を受け恥ずかしい気持ちも少し薄らいでいた。

「え．．．っと．．．マスター．．．私たちと本契約してもらえるのかな．．．」

すごく恥ずかしそうにアスモデウスが聞いてきた。
それに対し蘇芳は、ちよつと眼をそらしながら

「っていうか何で今なんだよ．．．まだ出会って1週間だぞ？
俺に決めていいのかよ！やり直しは効かないんだろ？それで本当
にいいのかよ！」

「マスターじゃないとやだ！お願いだから私と本契約して．．．」

そう言って少し涙声になって瞳を潤ませているアスモデウスを見た
蘇芳は

（契約してもいいかな．．．）

ともおもったが

「もうちよつと考えさせてくれないか？さすがに考える時間が欲しいよ。」

俺にとっても重要なことだからさ」

「うんいいよ！この間みたいに私を庇ってマスターが怪我しちゃうのはイヤだから・・・」

私だってマスターを守れるってところを見せてあげたいんだもん・

・
ゲーム用の仮契約の状態だと魔法どころか魔力の放出も出来ないから・・・」

そういつてうつむくアスモデウスを見てるとちよつと嬉しくなつてくる蘇芳だった。

これほど1人の女性から想いを寄せられることなど今までなかったからだ。

そして蘇芳は

「気にするなよアスモデウス。俺が好きでやったことなんだからさ・

・

それにさ、俺だって少しはかっこいいとこ見せないとな！

お前に愛想つかされてもイヤだしな！」

と、そんな照れ隠しをいいながら笑った。

結局この日は本契約をすることはなかったが、そんな風に自分のことを想ってくれる

相手がいるということを実感できた蘇芳だった。

2話・3(後書き)

ちよつと短めです。本契約の方法・・・すごい無理矢理な気もしますがこんな感じで進めて行きたいな・・・と思つてます。感想やご意見などいただけると嬉しいですよ！

2話・4(前書き)

更新が物凄く遅くなってしまいました・・・orz
完結はさせるつもりですので長い眼で見ただけだと嬉しいです。

2話 - 4

アスモデウスとやり取りをしていると、不意にガブリエルに

「あの～マスター、わたしとアーちゃんの真名をもらっていただけ
ますか～？」

と、声をかけられた。

蘇芳は今回教えられるまでアスモデウス・ガブリエルというのが名
前だと思っていたので、

一体真名っていうのはどういうものなんだろう？などと考えながら
こう答えた。

「真名って・・・一体どういうものなんだ？ガブリエルとかアスモ
デウスっていうのは
名前じゃないのか？」

「あ～それは自分の名前じゃないんですよ～なんていうか～え～っ
とですな～」

人間界でも～王様とか 何世とかってあるじゃないですか～？
あれと一緒ですよ～

わたしは～6代目のガブリエルなんです～」

「私は8代目だよ。父様がアスモデウスでいた時間が短かったから
ね。

とりあえず世襲制っていうか自分が選んだ相手に名前を引き継が

せる感じかな」

「それですわね。わたしの真名は、『リルファイアーナ』といいます。これからもよろしくお願いしますね。マスター」

「私はちよつと名前を教えるの恥ずかしいんだよね・・・」

そついいながらガブリエルが名乗った後に、アスモデウスが言い辛そうに切り出した。

「どうしたんだ？なんか恥ずかしいような名前なのか？」

「あのね？私が生まれた時に父様はギリシアの方に仕事で行ったんだ。

仕事ってというのは、人間に召喚されて少し手を貸してあげたり、知識をあげたりすることなんだけど・・・そのときにね？『いいことを聞いた！』

って帰ってきたらしいんだけど・・・ギリシアの方の神話で狩りと美と月の女神様が

いるらしいのね？それで私にその名前をつけたらしいんだけど・・・
・
魔族の娘に女神の名前をつけるなんておかしいよね・・・それでちよつと恥ずかしくて・・・

それでね？私の名前は『アルテミス』っていうんだけど・・・あの・・・
の・・・
笑いたかったら笑ってもいいからね？」

そついつて恥ずかしそうにちよつとつむきながら上目遣いに見上

げてくる彼女を見てみると、
すごく「かわいい！」と言つ気持ちが湧き上がってくる蘇芳だった
が、

「そんなことないよ？お前つてすごく美人だし、いい名前付けても
らつてるじゃん！」

お父さんに感謝だよな」

そんな風にしか返せない自分にちよつとがっかりとしながら彼女の
顔を見るのだった。

「そういうことでわたしのは『リル』つて呼んでくださいね〜
それからマスター以外の人には真名は知られたらいけないので〜
他の人には言わないようお願いします〜」

「えつと・・・真名を知られちゃつた相手には逆らえなくなつちや
うんだよ・・・」

だからね、私たち天使や魔族は真名を本契約をする相手にしか教
えないようにする

きまり・・・みたいなものがあるんだよ。だから愛称つていうか
人間で言う

ニツクネームみたいなもので呼び合うようにしてるんだ・・・そ
れでね？・・・

私の愛称は・・・あの・・・『アリス』・・・なんだよね・・・

「

そついいながらアスモデウス・・・いや、アリスは苦笑した。それ

を聞いた蘇芳は2人に

「そんなに大切な真名っていう物を俺なんか教えちゃって良かったのかよ。」

それに・・・もしかしたら俺がお前たちに変な命令したりするかもしれないんだぞ?」

「マスターの命令なら何でも聞くよ! ううん、何でも命令して欲しいな・・・どんなことでもいいよ」

「そうですね、それはわたしも同感です、マスターの命令ならなんでもお聞きしますよ」

真顔でそういう2人に、蘇芳は少し言葉に詰まった。しかしすぐにあることを思いつき、軽くニヤツとしながらこう告げた。

「そっか・・・じゃあいきなりだけど命令しようかな・・・」

「うん! なんでも言って! なんでもいいよ」

そっいつて嬉しそうに微笑むアリスの顔を見ると、なぜかこっちまで嬉しく

なってくるような感覚に襲われながら、蘇芳は2人にこう命令した。

「わかった。それじゃあ2人に命令するよ。これからは、俺のことは『蘇芳』って呼ぶこと！いいな？」

「え………と……あの………じゃ、じゃあ………す……すおう」

「ん？なんだ？」

「えっと……エへ呼んだだけ」

少しはにかみながら顔を赤くしているアリスを見つつ蘇芳が何かを言おうとすると……

「あの～あんまり二人の世界にはいらねちゃうと～わたしさみしいのですよ～」

「おっと！悪い悪い……えっとリルも俺のことは蘇芳って呼べよ？」

「はい～蘇芳様でいいんですね？」

「って様はいらないから！」

「あらあら～それじゃあ～ご主人様で～」

「っていつか悪化してるし！」

「え～っと～じゃあ～マスターで～」

「戻ってるじゃん！」

「だったらどう呼べばいいんですか？」

「だから蘇芳でいいんだつてば！」

「ですから蘇芳様でいいんですよ？」

「つつーかまたか?!」

「すおー、リルは言い出したら結構頑固だから・・・

それに、リルは大体の相手には様を付けるから気にしないほうがいいよ？」

そんな感じでやり取りをしながら、意外にも頑固なリルの一面を垣間見る蘇芳だった。

2話・4(後書き)

3話とのつながりの部分なので短めです。

3話・『偽りと出会い』（前書き）

前回は短かったので連投です。こっちも短いですが……

3話・『偽りと出会い』

それからの2・3日は平和だった。外出しても追いかけることはなかったし、

特にこれといったトラブルもなかった。

蘇芳は「こんな日が毎日つづけばいいのにな」なんて思いながら、その3日間を穏やかに過ごした……。だが4日目にそれは起こった。

ちよつとした用事で外出していた蘇芳は、急に数人の男に囲まれた。どうやら運の悪いことに天界か魔界の軍の者に見つかつたらしい。どうやら彼らは半分ほどの人数が魔術師のようだった。

残りの半分は天界・魔界・精霊界のどれにも属していない、つまり普通の人間だった。

蘇芳はこの日、近所のコンビニに買い物へ出ただけだったのでアリスとリルは部屋で待ってもらっていた。部屋から数分の場所にある

コンビニに行くくらい時間で襲われることなんて「まさか」ないだろうという

浅はかな考えをしていたことのツケが回ってきたようだ。

蘇芳が周りを囲んでいるヤツらをどうやって振り切って逃げようかと考えていると、

背後から急に声をかけられた。

「こんにちは、君は魔術師だね。天界軍・魔界軍のどちらかな？ それとも精霊界軍かな？どちらにしても、はじめまして。

俺の名前はコウサク、君の名前を聞かせてくれないか？」

「こんな風に取り囲んでおいて……。聞かせてくれもなにもないん

じゃない？

「いっそのこと名前を言えって言われた方がしっくりくるけどさ」

「そうか・・・だが逃げられるわけにはいかなかったんでね。

「こういう風に退路を塞がせてもらった。悪いが少し質問に答えてもらえないかな？」

「ソレって強制？そうじゃなかったら俺は帰りたいたいんだけど・・・」

「残念だけど強制させてもらうよ。いくつかの質問でいいんだ、答えてもらえるね？」

「答えなかったら・・・まあいいや、俺は蘇芳。名前は教えるけど質問に答えるつもりはないよ。」

蘇芳はそう答えながら彼らの動きを観察していた。

なぜなら彼らの隙を突いて逃げるつもりだったからだ。

そして観察しながら心の中でアリスとリルに呼びかけていた。

（アリス！リル！今コンビ二の前なんだけどさ・・・ちよつとやばいことになった。

魔術師みたいなやつらに囲まれちゃってさ、逃げられそうもないんだ）

蘇芳がそういうと、驚きと動揺の感情が伝わってきた。

そして急いで自分のところに2人が来ようとしているのがわかった。二人が到着するまでどうやって時間を稼ごうかと考えていた蘇芳だ

つたが、
それもすぐに気にならなくなった。
目の前にいる「コウサク」と名乗った男が話しかけてきたからだ。

「質問に答える気はない……か。それは困ったな……どうしても答えてくれるつもりはないか？」

「ないね。悪いけど忙しいんだ、俺は帰らせてもらっよ」

そういつて蘇芳が動こうとしたとき、コウサクが仲間の魔術師に何かを言った後に蘇芳に言った。

「悪いが帰らせられないんだ。凌ハル！魔法を」

凌と呼ばれた若い魔術師の男が詠唱を開始した。
蘇芳はどうやってその魔法を避けようかと考えていたが、不意に頭の中に声が響いた。

（すおー！その魔法は絶対に受けちゃダメ！）

（アリスか？どうしたんだ急に？アレくらいの魔法ならそれほどダメージもなさそうだけど……？）

（ダメージはなくても絶対に受けちゃダメだよ！どうにかしてあの魔法が発動しないようにして！）

なぜか必死な様子のアリスの言葉に疑問を感じながら、
蘇芳は相手の魔法を打ち消す魔法を詠唱し始めた。
しかしその間も相手は詠唱を続けている、どうやらかなり長い詠唱
のようだ。

「全ての魔法よ動きを止めよ・その使い手は啞然として・自らの魔法
が消える事を見よ！」

その時相手の詠唱も終わり、ほぼ同時にお互いの相手に向かって魔法
を解き放った。

「マインド……」

「ステューパー！」

「マリオネーション」

凌の詠唱に割り込むように蘇芳の魔法が発動された。

しかし凌の魔法は蘇芳の発動させた

スティーパー
【呆然】によって打ち消されていた。

その光景を見ていたコウサクや周りを囲んでいた者たちは騒然となり一瞬緊張が崩れた。

その隙を突いて逃げようとした蘇芳だったが、不意に聞こえた

(あぶない！)

というアリスの叫びに体を横にずらした。

その直後に右腕に鋭い痛みを感じた蘇芳はかるうじて叫ぼうとする自分を抑えて腕を見た。

そこには後ろから細身の剣に貫かれた自分の腕があった。

「おいおい・・・なにまどろっこしいことやってんだよ。質問にも

答えねえ、

仲間にもならねえっつーのならさっさと殺しゃあいいだろうがよ」

「シユウ！勝手な事をするな！大丈夫か？蘇芳・・・と言ったな。

すまない、仲間がひどいことをしてしまった。それに凌もだ！

俺はマインドリーディングを使うように言っておいたはずだぞ！

なぜ勝手にマリオネーションに変えたんだ！」

「俺が変えさせたのさ。いちいち考えを読んで交渉をしようなんて
まだるっこしいことしてねえで操っちまえばはええんだよ」

そういつて仲間内でもめ始めた彼らを意識から切り離し、

アリスに逃げ道を指示させながら蘇芳は逃げることにした。

3話・『偽りと出会い』(後書き)

z 先頭描写は苦手です・・・もっと文章能力が欲しい・・・OR

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5462i/>

Deadend Game

2010年10月10日22時24分発行